

白杵市教育委員会所蔵『舟水和歌集』翻刻

渡瀬淳子

【書誌】

外題「舟水和歌集」（三門・和八二号）全一冊、内題なし。

縦27.9cm×横20.2cm 利休茶布目型押表紙 五ツ目袋綴。

中央上寄りに金箔を散らした鳥の子の題簽を貼る。料紙は楮紙。墨付四一丁。奥書「寛政五癸丑年／雍通／藤田重當／芝崎宗方／河合由明／三浦義成／溝口重休／藤井文崇」

稲葉雍通いなばてゐちについて\*

豊前白杵藩（五万石）十一代藩主。安永五年生まれ、弘化四年没。享年七十二。寛政十二年（二十四歳）、父弘通の隠居にともなつて藩主となる。文政三年（四十四歳）、長男尊通に家督を譲り隠居するも、家督を継いでわずか一年半ほどで尊通が病死してしまい、三男の幾通ちかみちを藩主として後見、以後逆縁が続き、没するまで幼い藩主の後見役として藩政にかかわった。藩校の整備など教育を重視し、火の車だった藩の財政を建て直すために自ら率先して領内に質素儉約の気風を根付かせるなど経済政策にも尽力した。武士の学問として実学を重視したと言わ

れているが、和歌など古典への造詣も深く、絵図や古典籍の書写・収集も行っている。若年の頃の著作に『入邦記』\*2、晩年の作に天保十年に建部政醇たけべまさあつ（播磨国林田藩八代藩主）が八幡神社奉納八景として作らせた中に冒頭の「聖岡春望」の題で和歌を詠んでいる。（ちなみに二番目の「佐見山朝霧」は息子の幾通が詠んでいる。）生涯に亘つて和歌に親しんでいたようだ。明治二十一年に和歌の遺稿をまとめた『美豆穂歌集』が刊行される。

舟水和歌集について

藩主と近臣たちによる歌集。寛政五年は数えて雍通十八歳にあたり、家督を継ぐ前の若様時代の作品集。歌集に名を連ねる人々は家臣であろう\*3。藩主と年の近い上級武士の子弟等かと思われる。

歌題は全て三字題で統一され、ちようど百題ある。堀川百首以来の伝統的な題だけでなく、近世以降新たに読まれるようになった題が混在している。一見したところ藩内の地名などは詠まれておらず、詠みぶりは実にオーソドックスな堂上流であ

る。また、藤原為家・飛鳥井雅経・土御門院らによる同名の歌集が龍谷大学図書館にあるが、本書への影響などはまだ調べられていない。

【舟水和歌集翻刻（全文）】

・改行は原典の改行に従い、改頁の際は丁付を記した。  
・漢字・仮名遣い等の表記は原典通りとした。虫損などで判読できない部分は□、辛うじて判読できたものは（ ）で示した。

立春朝

雍（通）

出る日の影も曇らて四つの海なみしつか成（春）□□□

重當

あけ渡る空もしつかに出る日の光りを見せて春は来にけり

宗方

山は皆雪も残らて此朝け霞と共に春や立ちらん

由明

朝日影分て長閑にさし登る高根よりこそ春は来にけ（れ）

義成

天の戸も長閑に明ておのつから光り普き春は来にけり

重休

なへて世の人の心も今朝は猶和らく国の春や立ちらん

出る日の光りも今朝は長閑にとゆたけき御世の春や立覧

文崇

霞満山

雍通

□□の声はかりして松檜はら霞に籠もるおはつ瀬の山」1才

重當

峯麓それともわかれて遠山は霞籠ぬる此ころの空

宗方

のとかなる春としられて昨日けふ霞にもるゝ山のはもなし

由明

立まよふ霞や幾た目馴つる山も昨日の姿とはなし

義成

今朝ははや峯も麓もおしなへて霞棚引四方の山く

重休

山は皆霞の海になり果てうき嶋高き峯の松はら

文崇

消かての雪たにあるを山は今朝峯も麓も霞籠け（り）

遠村霞

雍通

しつかたく煙りと見えて夕風に霞棚引山本の（さと）

（重當）

朝夕に立る煙りのそれなからかすみて分ぬ遠□□

(宗方)

此比は軒端も見えず春深き霞にうつむ山本の里  
― 1ウ

由明

陰たかき柳はさすか山本の里のしるへに霞残れる

義成

うち向ふ峯はあらしやすきふらん麓にかすむ(遠)の山里

重休

しつかたく夕けの煙立そひて霞ふかむるやま(本)の里

文崇

朝夕に見えし煙りも分ぬ迄霞へたつる遠の一むら

雪中鶯

雍通

消残る雪を花とや我宿ののきはの梅に来鳴鶯

重當

ふりつもる雪の中にもうちとけて鳴鶯の声は長閑き

宗方

雪もまた消ぬ園生にうくぬすのひとり春しる声の長閑さ

由明

かきくてれ猶ふる雪に忘れし春を二たひ告る鶯

義成

ふる雪にいつれを花とまとはてや梅の梢に来鳴鶯  
― 2オ

重休

消あへぬ雪におもへは此春のはつ音いまめきまとの鶯

文崇

さき出る花かと見てやしら雪の降つむ枝に鶯の鳴

尋若菜

雍通

昨日けふ野への若菜を尋てもまたはつか成雪の下萌

重當

さえかへり又ふる雪をうちはらひ若菜もとむる袖の寒けさ

宗方

むら消の雪間もとめていさけふは春も浅野の若菜つまなん

由明

初若菜つまゝしものといたつらに霜ふかき野をけふも分నికి

義成

生出るかたやいつこと春の野の雪間尋て若菜を(そ)つむ

(重)休

したもえの若菜尋て春の野の雪かきわくる(袖の寒)けき

文崇

若菜つむゆき間もみえぬ春日野や尋るのみにけふもくらしつ

― 2ウ

松残雪

雍通

峯たかみ霞みながらも谷陰はいまた春寒き雪の松(か)枝

重當

山高み霞む日なからさえかへりつれなく残る松のしらゆき

宗方

春寒み雪に埋れて常磐なるいろとも見えぬ庭の松か枝

由明

一しほの松の緑りも埋れてまた頭はれぬ去年のしら雪

義成

春またき花かとそ見ゆ岡の辺のまつの梢に残る白雪

重休

春も猶去年見しまゝに埋れて雪をときはの谷の杓か枝

文崇

十かへりの花とやは見ぬ春来ともまつの梢に残る白雪

朝余寒

雍通

春風にうち出し浪も今朝は又氷りにとつる谷の川水 一 3才

重當

起出て今朝は霞むと見るかうちに雪気もよふす空の寒けさ

宗方

昨日迄霞し空のいかなれは今朝は雪けに又曇らん

由明

さし出る日影はさする春なれと猶吹風は袖に寒けき

今朝は又去年の雪気に立帰るかすみもやらぬ空の寒けさ

重休

かき曇り今朝はみそのふる年に又さえかへる風の烈しき

文崇

春はたゝその名のみにてさえかへるあさけのそらそ冬にかはらぬ

梅始開

雍通

また消ぬ雪の梢にいと早も春告て咲梅の小花

重當

けふよりは香にあらはれて庭の面の垣ほにさけ(る)梅の初花

宗方

待くらし梅は夜の間に咲初て香をなつかしみ匂ふ朝風 一 3ウ

由明

ひとつ二つ先咲初し梅か香をはやむつましく誘ふ春風

義成

香に匂ふ風のしるへに起出てむかふ軒端の梅の初花

重休

待詫る心やすめて雪のうちに一花それと匂ふ梅か香

文崇

鶯もやかて来鳴ん一つ二つはな咲そむる庭の梅かえ

川岸柳

雍通

佐保姫の打たれ髪か川水に影もみたるゝ岸の春柳

重當

川きしにいく世の春かふる柳した行水に影を移して

宗方

棹姫のいとくり出て川水のなかれに洗ふ岸の春柳

由明

河淀のしつけき水にかけとめてさはくは岸の風の青柳

義成

川波のかゝる岸根に枝たれて玉ぬきとむる春柳の露」4才

重休

きし根行水の鏡に川添の柳の眉や影移すらん

文崇

うちなひく岸の春柳移ろいて水にも風の姿をそ見る

沢若艸

雍通

春来ぬと沢辺の水やぬるむらんなみも緑にもゆる若艸

重當

春なから残る雪間に色見せてやゝもへ出る沢の若艸

宗方

昨日けふ浅沢水に生出てみとりすくなき春の若草

由明

今はゝや野沢の水もぬるむらんむらくもゆる春の若艸

義成

此ころは野沢の水とけ初てみとりそ深き春の若艸

重休

かほり解く野沢の水の浅緑かつ見る草の色も珞らし

文崇

浅沢の水も此比ぬるむらしあたりにもゆる春の若草」4ウ

浦春月

雍通

鏡山ほのかに見えて滋賀のうらやさゝ浪霞む春のよの月

重當

春は猶しほやく煙立そひて霞そふかき浦の月影

宗方

朧夜の月を舍して浦人のしほくむ袖も春は長閑き

由明

いひしらぬ見るめもそえて打霞浦の苦やの春のよの月

義成

影霞む詠めは秋にまさりけり難波のうらの春の夜の月

重休

春の夜は浪の花さへほのくと霞に匂ふ浦の月影

文崇

さやか成秋ともいはしすまの浦や波間に霞む春の夜のつき

江春月

船よせてあかすも今宵湊江のなみ間に霞む春の月影 一 5才

雍通

重當

芦火たく海士の軒端の月影はさらても霞む難波江の春

宗方

長閑なる影を移して難波江のなみ間にかすむ春のよの月

由明

大空は消ぬる影も難波江の霞にゆるす春のよの月

義成

難波江や芦の葉末を分出るつきも朧に霞む春の夜

重休

うつし絵のそれかとはかり満塩に霞色とる墨の江の月

文崇

梅柳それたに有を難波江や浪のよるく霞む月影

峯帰雁

雍通

咲花のなこりもしらす峯幾たこへて常世に帰るかりかね

重當

峯越る雁の名残やいかならん又来ん秋の程を思へは

宗方

見送るも遠き越路の峯こえて霞にさゆる春の雁金 一 5ウ

由明

しはしこそことも峯の浮雲にやかてまきる天津雁かね

義成

咲花に心もとめすはるか成みね飛越て帰るかり金

重休

明ほの峯の横雲立別れなこり今はの春のかり金

文崇

つれなくも花咲みねを越て今己か常世に帰るかりかね

野径雉

雍通

往来にも馴てや道のかたはらに野へのきすのほろ打声

重當

狩人の分入野辺としらてたうき妻こひにきす鳴也

宗方

山人の往かふ野へになれくて妻乞きしののし羽打也

由明

子や思ふ妻をや恋る野を分て行衛も跡も雉子鳴也

義成

旅人の往来たへぬ道の辺にしひ行野のきす立也 一 6才

重休

狩人の分て入野の道そとはおもひしらてや雉子なくらん

文崇

かり人の入野のきゝすはかなくも子を思ふ道に迷ひてや鳴

風前花

雍通

咲はちるならひなからも今しはしこゝろして吹花の春風

重當

さくら花やかて散へき一枝を誘つる春の風はうらめし

宗方

ちらぬ間に来て見よとてや咲花の匂ひを送る山の春風

由明

何となく心いられや吹風に餘り薫れる花の木のもと

義成

咲はちる花のならひとひなからさかりはいとへ四方の春風

重休

花に今いとふもあやな尋来しほとはしるへにたのむ山かせ

文崇

春風も心してふけ花のかをおくるはかりは枝にいとほし」6ウ

竹間花

雍通

色かえぬ契りをかかせ呉竹の小枝に更る花の一本

重當

さくら花竹の葉分の春風に色弥らしく見ゆるひと本

宗方

呉竹の葉分の風の匂はすは咲そふ花も雪と社見め

由明

千代も猶かはらてや見ん呉竹のさ枝に更る花の一本は

義成

吹分る竹のひまもる山さくら花にはいとふ風そ待るゝ

重休

枝かはす竹に契りて春いく代かはらぬ花の色香ともかな

文崇

枝かはす園生の竹に契り置て花も幾千代咲匂ふらん

苗代蛙

雍通

せき入し苗代水に所得てこのもかのもに蛙なく也」7才

重當

春深き苗代水に声立てそことも分ず蛙鳴なり

宗方

せき入る苗代水に声立て夕淋しく蛙なくなり

由明

所得て蛙鳴也きのふけふ水せき入し小田の苗代

義成

雨かすむ苗代小田に蛙なく声ほのか成暮そ淋敷

重休

せくも又水浅しとや苗代に雨呼かはつ声しきる也

文崇

勢きいるゝ苗代水を待得てや山田の面の蛙鳴らん

籬款冬

雍通

あかす見ん花より後も行春を真垣に籠て匂ふ山吹

重當

置露も色にそ出る山吹の花もてゆへる庭の真垣は

宗方

暮て行春の余波や庭の面の笹に咲る山吹の花

由明

いはぬ色そ猶哀成朝露の重る真かきの山吹の花

義成

心あらは尋来てとへ山吹のいはぬ色なる花のまかきも

重休

はらはねはあれ行草の真垣にも春をやつさぬ山吹の花

文崇

いつれをかわきて手おらん八重一重更る真かきの山吹の花

瀧下藤

雍通

咲藤の色を移して紫きにはるは染出す瀧のしら糸

重當

さく藤の影もうつりて紫に峯より落る山の瀧つ瀧

宗方

むらさきの藤咲岸に打はえて色に染なす瀧のしら糸

由明

瀧津瀬は一筋白き岩か根に寄らは風の藤浪の花

義成

岩根より乱て落る瀧の糸にあやおりかくる花のふし浪 一 8 才

重休

落瀧津ひゝきいましもたまらしを岩こす浪や花の藤か枝

文崇

瀧津瀬のあたりに藤の花咲てちる岩浪も色に移ろふ

河暮春

雍通

よしの川花を誘ひて行水のとむ瀬もなく春そ暮ぬる

重當

いつしかとうつる弥生の早瀬川よとまぬ春の名残をそ思ふ

宗方

しとふそよ月日よとまぬ川水の流は早き春の名残を

しはしたに待こそと、めね河水の流は早き春の別れは  
由明

義成

行水に移る弥生の早瀬川せく方もなき春の別路

重休

大井川春の行瀬やよとむらんいせきに懸る花のしら浪

文崇

と、むへきしからみもなし飛鳥川あす斗成春の行瀬を  
― 8ウ

山首夏

雍通

花は皆誘ひ尽して夏木立茂る若葉に山風そふく

重當

山くは霞の衣ぬき捨てみとりにはる、今朝の涼しさ

宗方

山のははけふより夏の色見えて若葉に通ふ風そす、しき

由明

昨日迄霞し山も今朝ははやみとりにはる、夏は来にけり

義成

山の端も霞の衣立かえて青葉にしける夏は来にけり

重當 (ママ)

やまも今朝春に別れし名残とや若葉の梢露にしほる、

文崇

山くは夏来にけりとしけり行木々の若葉の色そ涼しき

谷餘花

雍通

なへて咲春にはもれて谷深き若葉か中に残る一花  
― 9才

重當

谷陰や春はつれなき遅さくら若葉に匂ふ花もめつらし

宗方

夏来とも谷には春も残るかと思ふはかりの花の一本

由明

谷かくれ有とも風にしられぬや夏迄花の散残るらん

義成

谷深み爰には春も残るかと青葉に更る花の一本

重休

谷陰は風もしらすや残すらん春より後の花そ久敷

文崇

さくら花よ所におくれて咲ぬるはまた谷陰に春や残れる

隣卯花

雍通

月夜よしよ、しとそみゆ芦垣の間近き宿に咲る卯花

重當

心をはいかて隔ん芦垣のよ所成宿に咲る卯花

卯木咲花の中垣ありなからめつる心は隔さりけり  
宗方  
— 9ウ

いかなれは隣はかりの夕月夜覚束なしとみゆる卯花  
由明

よ所目には月かとそ見る中垣を隔てゝ咲る夜半の卯花  
義成

それと見る心はかりは昔垣のよ所にへたてぬ宿の卯花  
重休

中垣のそなたにさける卯花もめつる心は隔さりけり  
文崇

里郭公

雍通

かりふきし軒のあやめにねをそえて里とひかほに鳴時鳥

重當

ほとゝきす難面なかりしも時来てやいつくの里も定かにそ聞

宗方

時鳥声もおします里馴ておのか五月は百千返りなく

由明

いく夜半か待し印は郭公遠里小野のよ所の一声

義成

此里にしはしかたらへあし引の山時鳥音をおしむとも  
— 10オ

重休

我ことや人も待らん子規この里にのみ声な尽しそ

文崇

きのふ今日己か五月と誰里も山時鳥鳴渡るなり

夕早苗

雍通

植渡すしつか門田に涼しくも夕日移ろふ露の玉苗

重當

うえ渡す門田のさなへしけりあひて緑涼しくなひく夕風

宗方

小山田に時過ましと早苗艸とる手数多にいそく夕暮

由明

明日は又ふしたゝんとや夕日影入果る迄さなへとる也

義成

田面には早苗とりく乙女子か暮はてぬ間といそく諸声

重休

うかふせの露の恵もいとゝ猶夕は深き小田の若苗

文崇

雨晴て今を時そと夕日影さすや岡部にさなへ取なり  
— 10ウ

橘薫袖

雍通

吹送る風の度く我袖にむかし忍へと薫る立花

重當  
露なから風にちり来て夏の夜のはし居の袖に匂ふ橘

宗方  
袖かほる花橘の夕かせに有しむかしを猶や忍はん

由明  
なつかしな我袖なから橘の昔を今も移すにほひは

義成  
朝またき花立花を折袖にむかし忍へと露そこほるゝ

重休  
かけふみし昨日の昔忍とやけふ迄袖にかほる立花

文崇  
閨の戸を明れば袖に通ひ来てすゝしく薫る風の立花

五月雨

雍通

重當  
晴間なく日をふるまゝに鈴鹿川八十瀬湊なす五月雨の比」11才

宗方  
五月雨のふり出し日も忘艸のきはに茂る此の比の空

由明  
かきくらしふるやの軒の朽る迄晴間も見えぬ五月雨の比

義成  
今日いく日降くらすらんせき入ぬ庭に川瀬の五月雨の空

ふるまゝにみきはの艸もみえ分て猶廣きはの五月雨のころ

重休  
月の船はいつ待出ん空の海に雲の波たつ五月雨の比

文崇  
五月雨の日数つもりてみな川みな底深き湊と成ぬる

夜水鶏

雍通

明け方も程近しとや槇の戸をたゝく水鶏の夢覚らん

重休  
閨の戸を叩く水鶏に目覚して暫しぬる夜の夢も結す

宗方  
我のみか侘もぬる間は夏の夜にひとり水鶏の門たゝくらん

由明

義成  
絶す猶たゝく水鶏に天の戸を早くや夏は明習けん

重休  
夜もすから水鶏は河をたゝくらん月のみさせる槇の板戸に

文崇  
誰とへとたのめもおかぬ閨の戸をたゝくや夜半の水鶏成らん

さらてたに明やすき夜の天の戸を叩く水鶏の何いそくらん

夏月涼

雍通

風ながら軒端もり来て閨の内にすゝしく舍る夏の夜の月

重當

村雨の晴てすゝしき月影にはし居の袖も更る夏の夜

宗方

すゝしさは猶や通ふと見るまゝに空明やすき夏の夜の月

由明

手にならず扇の風も忘るゝや高根に月のさし出しより

義成

池の面にすむ月影を見るくもふけて涼しき水のをはしま

— 12才

重休

すゝしさはさなから秋と見る月に夏を忘れぬ短夜の空

文崇

はし居して詠る影の涼しさに更るもをしきみしか夜の月

夏草滋

雍通

あけまきもからぬ野もせは陰深く茂るをまゝの薄高かや

重當

はらはしな茂りあひたる夏艸も秋はさまくの花もてそさけ

宗方

秋を待花に心の引れてはかりもはらはぬ庭の夏艸

由明

軒端迄生茂りけり人間はぬ庭は野もせにまよふ夏艸

義成

朝夕に通ひ馴にし道たにもふみ迷ふ迄しける夏艸

重休

萩すゝき秋待草はさもあらで植ぬに茂るむくら蓬生

文崇

旅人も道や迷はんやゝ深くしけりあひたる野への夏草 — 12ウ

瀬鵜川

雍通

明ぬるか川瀬の波の立別れ帰る鵜舟のかゝり火の影

重當

うかひ舟此夕やみをよゝしとてさすや川瀬の篝火の影

宗方

篝火の過るそをそぎうかひ舟なみの高瀬やさか登るらん

由明

早瀬川下す間もなく短夜の明る名残やさそうかひ舟

義成

早瀬川鵜舟の手繩くり返しなみの夜るく照すかゝり火

重休

鵜飼舟瀬にふす鮎や大井川山本さらぬかゝり火の影

うかひ舟数あらはれて玉嶋や七瀬をのほる篝火の影  
文崇

叢間螢

風さはく野への艸葉の起ふしに見えみみえすみ螢飛影  
雍通  
― 13才

夜を深み露置そふる草の葉にすかる螢の影の涼しさ  
重當

飛螢草葉の露にぬれてしも猶きえやらぬ思ひをそ知  
宗方

立よれば涼しさそそふ飛螢草村毎にひかり乱れて  
由明

草村のしけき下葉に置露のかせにちらぬや螢成らん  
義成

風にちる露かとはかり草むらに夜はほたるのかけそ乱るゝ  
重休

をく露の光りまかへて涼しくも艸のしけみに螢飛也  
文崇

蚊遣火

ゆふまくれたてし煙りにさそはれて残りすくなき夜半の蚊の声  
雍通  
重當

夕くいとゝいふせき木かくれのしつか軒はに立る蚊遣火

宗方

夕間暮よ所に見るさへ蚊遣火の煙いふせき山本の里  
― 13ウ

由明

いほ安き後のおもひにいふせきもたえてや立る軒の蚊遣火

義成

たえ兼て立る蚊遣もよ所目には賑ふ里のけふりとや見ん

重休

遠くなる程もしられて夕暮のけふりの末によはる蚊の声

文崇

いふせくもゆふへくは蚊遣火の煙くゆらす山本の里

由明

夕立晴

雍通

夕立の過行雲の絶間より日影そわたる虹のかけ橋

重當

ゆふたちの跡なく晴るゝ庭の面に木々の雫の落てすゝしき

宗方

かき曇りふり来し雨も見る内に晴て跡なき夕立の空

由明

風そひて足とき空に鳴神そはるゝも早き夕立の空

義成

夕たちは跡なく過て木の間より涼しく出る山のはの月

入日影うつる外山に一すしの虹を残して過る夕たち 重休  
— 14才

ならのはに露を残して雲は今晴るゝ外山の夕立の空 文崇

森納涼

雍通

今しはし立やすらひて夏の日のあつさわすれん森の下陰 重當

立よりて休らふ程は夏の日のあつさもしらぬ森の下風 宗方

木の間より風の通ひて涼しさは夏を忘るゝ森の下陰 由明

日をそふる森の木陰は夕風の吹となけれと袖のすゝしき 義成

しはしとてやすらふ袖の涼しさは秋のけしきの森の下陰 重休

日暮れはいつしか夏もこかくれて秋をそならず森の下風 文崇

鳴蟬の声も夕は涼しくて夏をよ所成森の下陰

早秋風

雍通

露もまた置あえぬ程のうたゝねにはや秋告る床の朝風 — 14ウ

昨日迄あつかりし日も吹かえてけさより通ふ袖の秋かせ 重當

今朝よりは庭の萩はら音信てそよくも涼し秋の初風 宗方

今朝よりは秋としらせていと早も空吹風や音連るらん 由明

風の音はわきて昨日にかはらねと身にしむ今朝や秋のきぬらん 義成

明て今朝桐の一葉のちらぬ間にまつしる袖の秋の初風 重休

閨の戸のひまより通ふあさ風も身にしみそめて秋は来にけり 文崇

七夕橋

雍通

いつの代に渡りそめてや七夕のあふせ絶せぬ天の川橋 重當

幾秋もかはらて渡る七夕の契り嬉しき天の川はし 宗方

天の川翹ならへて年毎にあふせを渡す鵲のはし 由明

暮ぬるに渡してや待稀に逢今宵の星にかさゝきの橋 — 15才

又の秋をかけてや頼む七夕のわかれの袖の露の玉橋  
義成

重休

秋ことの逢瀬を天の川橋にかけし契りそ代々に絶せぬ

文崇

ちぎり待星の心やいそくらん暮なは渡せかさゝきの橋

深更萩

雍通

さらぬたに秋の衣もふかき夜の枕まちかきをきの上風

重當

しはしたに夢も結はず深夜の枕にそよく萩のうは風

宗方

夢結ふ程こそなけれ小夜更て枕にそよく萩の上風

由明

小夜更て淋しき宿に萩のはのこゝろやましくも友すりの声

義成

聞人のなみたの露もとゝまらすよふかくそよく萩の葉風に

重休

聞詫ぬ秋の衣も殊更にふかく成夜の萩のうはかせ

文崇

小夜深く露や下葉に結ふらん音たゆみ行風の萩はら

— 15ウ

萩散風

雍通

露よりもしく乱て吹誘ふ風のまゝなる秋萩の花

重當

見し色も移ろい果て今朝よりはかせに散行露の玉萩

宗方

吹風に今朝は誘ひと庭の面やにしき散しく秋萩の花

由明

しきり吹返る風に秋萩の花のにしきも中そ絶ぬる

義成

しら露もともに乱て吹かせに今朝散そむる野への秋はき

重休

秋風のふけは社あれ散行も花にとかなき庭の萩原

文崇

ちることをいつかは露にならひけん風立野への秋萩の花

女郎花

雍通

いけの名の姿をや見る女郎花水の鏡に影を移して

重當

女郎花しほるゝ野への朝露はたか起出し名残成らん

宗方

化成とおもひなからし女郎花なまめく野へは心ひかるゝ

— 16才

口なしと人はいへ共女郎花いはぬはいふに咲そ増れる  
由明

義成

吹かせになまめき立る女郎花あさゆふ露の玉かつらして

重休

女郎花誰か秋よりか吹風におもひ乱て露こほるらん

文崇

秋の野にひとりなまめく女郎花たはれて行人人なとかめそ

行路薄

雍通

穂に出て誰まねくらん玉ほこのみちの行ての風のをすゝき

重當

夕間暮野を分行は道の邊の尾花か袖も露とこほるゝ

宗方

ゆふ間暮風にみたれて道の邊に誰をかまねく花の小薄 16ウ

由明

秋風に絶すそ招く旅人の往来も多き野路の小すゝき

義成

諸人のゆきゝの岡の糸すゝきむすひもあへぬ秋のしら糸

重休

立かへり又もとへとや分る野の跡よりまねく風の小薄

文崇

たそかれは人も通はぬ道のへに尾花か袖の誰まねくらん

草花露

雍通

咲まじる花の千草の中にしもこゝろをかるゝ露の玉萩

重當

朝な夕な庭の千草の色に猶ひかりを見せておけるしら露

宗方

分来つる萩の錦の唐衣すそのゝ露に色と移ろふ

由明

さまくゝの花にし染て白玉か何そと問ん露としもなし

義成

咲出し秋の千草のはなことにいろ置分る野邊の朝露 17才

重休

咲萩の花より落てむらさきの色こき露の玉そくたくる

文崇

庭の面の草のはつ花かたさきてつゆもなかはは色に出けり

戸外権

雍通

荒果し賤か扉に咲出てあはれをかくるつゆの朝貞

重當

哀なり日影さし入楨の戸にしほれてかゝる槿の花

閨の戸を明てみきりの袖垣に心おかるゝ露の朝貞  
宗方

朝戸出て見れば盛りの槿は一日を限る花としもなき  
由明

はかなしなしはし日影を松の戸に盛りすくなき露の朝貞  
義成

色替ぬ松の扉に咲なからはなは化成露の朝貞  
重休

柴の戸にしはしかゝりて咲花の色も化成露の朝かほ  
文崇

雨後虫  
雍通

雨は今晴行庭の垣ねより又ふり出る鈴虫の声  
重當

むら雨のはれ行跡の草垣にみたれてそ鳴虫の声く  
宗方

雨はるゝ草のまかきに振出て露を詫たる鈴虫のこゑ  
由明

分て猶はへある虫の声す也雨も程よく晴し野もせに  
義成

降雨は晴行庭の草村に露を命と鳴虫のこゑ  
重休

雨晴て月になるより鳴虫の声あらはるゝ庭の浅茅生  
文崇

むら雨は晴行野への草村に露も涼しき虫の声く  
暮山鹿

うちそえて秋の哀ぞ増りける鹿鳴山の入相の鐘  
雍通

夕は山秋は男鹿と紅葉ゝの色に出てや春したふらん  
重當

暮かゝる葉山のかげに鳴鹿のこゑ吹をくる秋の夕風  
宗方

爰に聞も覚束なしや暮渡る山路に鹿の幽なるこゑ  
由明

柴人もかへる山路の夕くれにひとり淋敷をしか鳴也  
義成

夕暮は汝もおもひや正木散とやまの鹿の妻乞の声  
重休

あらし吹夕に聞は哀さも深艸山の小男鹿のこゑ  
文崇

荒果し山田の庵の軒端より寂しく通ふ秋の稲妻  
田家電

重當

重當

すみすてゝあれ行小田のかり庵にもるは替らぬ秋の稲妻

宗方

夜なくの友とこそなれ独りもる山田の庵に通ふいな妻」18ウ

由明

賤の男か小田のかり庵かりそめの世としらせてや照す稲妻

義成

山田もるしつかいほりの間をあらみ枕に通ふ夜半の稲つま

重休

月は今入し山田のかり庵にかけもりかえて照す稲つま

文崇

やま田もるかりほの苦のひまよりも通ひて照す宵の稲つま

船中月

雍通

沖津波千里をかけて行舟はさはるくまなき月を社見れ

重當

海はらや月の光りにさそはれて更るもしらす夜船こく也

宗方

さしのほる棹の雫に袖ぬれて月を舍せる宇治の川長

由明

さす棹の雫も月のかけちりてしつき夜半の舟路あかれぬ

義成

梶枕今宵もこゝにあかしかた月をかた敷床そ物うき」19オ

帰るさも月に忘れてはるくと舟漕出る難波江の秋

文崇

みなと舟月の出かほにあこかれてかけ更る迄漕もかへらす

月前旅

雍通

露むすふ草の枕は替れともやとるは同じ秋の夜の月

重當

けふも又同じ野山を行暮て月にそたとる秋の旅人

宗方

夜もすから夢も結はす草枕つゆけき袖に月を舍して

由明

さやか成月にうかれて終夜舎りもとらす行旅の袖

義成

あかし猶草の枕の夜半の月宮古と同じ影とおもへは

重休

よるも猶舎りさためす澄月にあこかれて行秋の旅人

文崇

更るとも越やゆかまし霧晴て月さやか成さやの中山」19ウ

霧中鴈

雍通

霧籠てそれかと見るも薄雲のもしおほる成雁の玉章

重當

時しもあれ待得し甲斐も半天の霧に隔つる秋の初鴈

宗方

霧深み翅も見えず中空に声はかりして渡るはつ雁

由明

峯越る声とはきけと初雁の翅は見えず霧深き空

義成

鳴そたる声はあまたに聞鴈もさたかに見えぬ秋霧の空

重休

幾つらと見る程もなく霧の中にかきけつ空の雁の玉章

文崇

霧ふかき沢田の面の夕くれに翅しほれて落るかり金

古渡霧

雍通

秋深くきり立籠てさす舟のさほの渡りもそこしられす」20才

重當

朝な夕な宇治の川きり立籠てわたせに迷ふ秋の舟人

宗方

立籠て船こきよせん方もなしさほのわたりの秋の夕霧

渡しもり有やなしやも分ぬ哉角田川原の霧深くして

義成

角田川こととひ詫て渡し舟ありやなしやとたとる夕きり

重休

駒とめて渡し待間の休らひに袖打しめる佐野の朝霧

文崇

すみた川霧立こめぬ渡し舟ありやなしやも分ぬはかりに

名所鶉

雍通

真野の浦の入江の浪に床あれて秋をうつらの音に立て鳴

重當

夕へく秋の哀も深艸の里をうつらの音にや鳴らん

宗方

菅原や伏見の小野に声立て秋をうつらの床しめて鳴」20ウ

由明

秋もやゝ更行まゝに鶉なく更野のみのゝ風そ身にしむ

義成

風渡るお花の波に床荒てまのゝ入江の鶉立なり

重休

かせ渡る更野の茅はら打そよき露散床に鶉鳴也

文崇

風そよく音も淋しき夕暮にうつら鳴也小野の篠はら

庭前菊

雍通

庭の面に今朝咲そめし白きくは籬はかりの雪かとそ見る

重當

朝夕に置白露も色に出てさける笹の秋きくの花

宗方

千とせふる色は真垣にあらはれて久しく匂ふ庭の白菊

由明

庭の面に千種の花の後も猶さかりを見せて匂ふ秋きく

義成

咲にけりなへて艸木は枯果る霜より後の庭の白菊

重休

つくりなす庭の真垣の山路にも千代の色ある秋の白菊

文崇

植置し甲斐もありけり秋毎の盛久しき庭のしら菊

垣紅葉

雍通

山かつの荒し垣ねに色はえてあきはやつさぬ蔦の紅葉ゝ

重當

常盤なる色ともみえず松垣に染る千入の蔦のみみち葉

宗方

時雨にもそめぬ常盤のまつ垣に秋を見せたる蔦のみみち葉

由明

松垣の荒にし儘の秋ならしならぬ紅葉の色に出すは

義成

荒果し賤か垣ほも秋といへは蔦の紅葉に色もやつさぬ

重休

住や誰蔦の紅葉のからにしきおりかけ垣の柴のいほりに

文崇

いかなれは時雨もそめぬ松かきにかゝれる蔦の色に出けん

— 21ウ

聞持衣

雍通

賤の女か夜寒かさねてうつ槌の音も淋しき麻のさころも

重當

誰里もおなし夜寒の秋風にうつ音淋し麻の小衣

宗方

夢覚てきけはしと打から衣さそ秋風の身にやしむらん

由明

暁の寝覚の枕そは立てきけは何国か衣うつ声

義成

賤の女かいとなきわさそ知られける夜寒重ねて衣打音

よ所に聞く我さへ秋は打侘てねぬ夜かさぬる麻の狭衣  
重休

更行とねられぬはかり音立ていつくの里も衣うつ也  
文崇

暮秋霜

雍通

何をかは形見といはん袖の霜むすひもとめす秋そ暮行 一 22才

重當

昨日けふまちかき冬の程見えて草の枯葉に置く朝霜

宗方

暮かゝる秋の名残にをく露もいつしか霜と色かはり行

由明

野辺の露もいつしか霜に置替てひと日二日そ秋はこのれる

義成

長月の末野々艸のうら枯にむすひそめぬる峯の初霜

重休

人ならば霜に行衛やしたはまし秋の別れは跡もとゝめす

文崇

秋はやく替行まゝにしら露も霜にそかはる蓬生の庭

初冬雲

雍通

昨日けふ冬来にけりと山のはに時雨もよふす雲そかゝれる

重當

冬来ぬと今朝はあらしも音替てしくるゝ雲をさそふ寒けさ

宗方

今朝よりは冬としられてむら雲のうきたつそらに時雨降也

一 22ウ

由明

冬来ぬと誰いはねとも此朝けむら雲まよふ空にしらるゝ

義成

冬来ぬと時雨催ふす山風にうき雲まよふ空の寒けさ

重休

今朝よりは空も時雨て見し秋のおもかけ替る風の浮雲

文崇

冬来ぬと寒るあらしに誘はれてしくれをいそく峯のうき雲

川時雨

雍通

山さきや曇ると見しかいと早もしくれて過る淀の川つら

重當

漕船の苦の雫も数そひてしくれふり行よとの川つら

宗方

かき曇り降もいとほす苦ふきて時雨にかよふ淀の川舟

由明

水かさこそ添とは見えね幾度かしくれてきほふ川波の音

義成

山の名の朝日は晴て一しきりしくれそ過る宇治の川面「23才

重休

八幡山くもると見しか時雨来てとまもふきあへぬ淀の川舟

文崇

宇治川や棹さしくたす柴舟のしはし時雨るゝむら雲の空

窓落葉

雍通

吹風に木の葉みたれて山窓のさしもねられぬ夜半の手枕

重當

しくれかとまくらにきけは音たてゝ窓に散くる風のみみち葉

宗方

降雨の音にまかへて夜もすからまとをそたゝく風のみみち葉

由明

さそはれて涙ももろく散ものは窓に夜深き風のみみち葉

義成

夜はすから袖ぬらせとや音たてゝしくれにまかふ窓のみみち葉

重休

時雨かと明てみきりの梢より落葉吹いるゝ窓の小夜風

夜もすから窓打雨と聞つるは風に落葉の音にそ有ける「23ウ

文崇

橋畔霜

雍通

かたしきの袖寒からし夜なくに霜置明す宇治の橋姫

重當

柴人は今朝置霜の深きをもいとほて渡る谷のかけはし

宗方

つま木こる人の過し程見えて霜にあとある谷のかけ橋

由明

朝日影移るかたより霜消て半は白き槓の板はし

義成

寒けしな渡りし人の跡もなくあさ霜氷る槓の板はし

重休

今朝はまた人も通はぬ程見えてしもに跡なき前の棚橋

文崇

川かせもゆうふへはさえて白妙のしも置渡す槓の板橋

山木枯

雍通

露霜にそめぬ檜はらも山まつもちれとやさそふ木枯の声「24才

重當

山高み秋のもみちも散果て音のみ残るまつのかからし

宗方

つれなしな秋の形見のもみち葉も今朝は残さぬ峯の木枯

由明

松杖も散かとはかり山のはにはけしく渡る木枯の風

義成

秋の色の形見とも見ん紅葉はを今朝吹つくす山のかからし

重休

椎柴もしるてちれとや朝夕にさはく外山の木からしの風

文崇

冬来れは常盤の山の松のはもさそはれぬへき木からしの風

朝寒艸

雍通

見し秋の萩もすゝきも今朝は又なへてひとつの霜の下草

重當

起出て向ふも淋し此朝気庭にかれふす霜の下艸

宗方

今朝はみな萩もすゝきも冬かれて霜の下なる野への淋しき

— 24ウ

由明

枯果て色なき野への冬艸に朝風渡る音の寒けさ

義成

見し秋の色も残らず朝ことのしもに枯行野への冬草

重休

冬も猶身にしむ色は残りけり萩の枯葉の霜の朝風

文崇

朝戸出に見るも寒けし初霜の枯葉に氷る庭の萩はら

池寒芦

雍通

あしの葉も霜枯果ていとゝ猶冬はみきはも廣沢のいけ

重當

風寒み波も氷て此比はしもにおれふす池の枯あし

宗方

冬枯の色も淋しく池水のこほりに立る芦の一むら

由明

寒けしな枯て打敷むら芦の浮葉を寄る池のさゝ浪

義成

霜氷る池のみきはおれふして淋しく枯る芦の一村

重休

いつしかと冬枯果て池水のみきは淋しきあしのむら立

文崇

よる浪の音も氷りて池水のみきは寂しきあしの冬かれ

氷初結

雍通

瀧川の音は替らて今朝よりは岩間によとむ波の薄氷

重當

谷川に流るゝ水も今朝よりは氷とちてや音も絶ぬる

宗方

夜の程にこほりそめてややり水のなかるゝ音も今朝は絶ぬる

由明

かれく聞し算の水の音も氷る今朝こそ思ひ合すれ

義成

夜の間にや氷そめけん今朝ははや算の水の音そたえぬる

重休

流れ行音も聞えず今朝よりはこほりにけりな庭のやり水

文崇

昨日今日峯のあらしの音さえてこほり初ぬる谷川の水 一 25ウ

冬寒月

雍通

霜雪の光りをそえて秋よりもかけさやか成冬の夜の月

重當

しら露もむすひかえたる草の上の霜に舍れる月の寒けき

宗方

置霜に猶てりそひて冬の夜の更行まゝに寒寒る月影

見るからに冷しき迄寒けしな山風みかく月の鏡は

義成

いとゝ猶さえこそまされ冬のよの池の氷にやとる月影

重休

庭の面の霜に舍りて寒けさもまさこ地白く月を更行

文崇

寒けしな鳥の声もさえ渡るそらくまなき冬のよの月

濱千鳥

雍通

哀にも波のよるく鳴衛つまやこぬみの濱におりゐて 一 26才

重當

浪よするみつの濱邊に鳴衛なれも難面妻やこふらん

宗方

よる波の高師の濱のはま風に夜寒の千鳥立さはく声

由明

波も今よせて寒けき濱風に翅乱れて千鳥鳴なり

義成

風寒き夜をいねかての濱千鳥かたふく月におちかへり鳴

重休

己か妻ふけてこぬみのはま風に夜寒託てや衛鳴らむ

文崇

風吹は波も高師の濱千鳥友呼かはす声さはく也

深夜霰

雍通

手枕の夢をくたきて笹の屋にあられ乱るゝ音の夜ふかき

重當

寒けしな聞の妻戸に音すとあかつき近く霰ふる音

宗方

夜もすから槓の板屋のいたつらにをき明せとや霰ふるらん

— 26ウ

由明

小夜ふかく目覚しけりな一しきり風もあられに夢路碎て

義成

一しきり霰ふり来て見し夢もくたくる夜半の床の寒けさ

重休

ねられすよ風にみたれて呉竹の夜深さまとに霰ふる音

文崇

ふくる夜の夢もくたけて玉あられ軒端過行音のはけしき

樵路雪

雍通

分入し跡をしるへに柴人のかへさたとらぬ雪のした道

重當

薪をふ友をさそひて賤の男のいそく山路に積るしら雪

宗方

打はらふ跡より雪の積りつゝそて寒けにもかへる柴人

由明

ふみ馴し山路も雪のふりつもる夕は嘸なたとるしは人

義成

ふる雪に跡うつもれて山人の分来し道や嘸たとるらん — 27才

重休

雪折の妻木とる男も今朝はまた跡付そめぬ谷の通路

文崇

柴人のなれし山路も今朝は又たとるはかりに積る白雪

狩場雪

雍通

立鳥の行衛をとむるかり衣日も落草の見え分ぬ迄

重當

風寒く雪け催ふす夕暮に今一よりとしとふかり人

宗方

立鳥の行衛いつこそ落草もみへぬ狩場の夕暮の空

由明

けふも又残る鳥立にくれはてゝ帰るかりはの名残をそ思ふ

義成

夕間暮鳥立もそれと見えぬ迄今一よりと急く鷹人

重休

覚束な山峰暮て立鳥に手放鷹の遠き追羽は

くれふかみ今一よりと思ふにも鳥立は分ぬ御かり野の原〔27ウ〕  
文崇

年内梅

雍通

明日は来ん春をもまたて雪のうちに  
かた枝先咲梅の初花

重當

年のうちにまつ咲出る一花ははる待かほの庭の梅かえ

宗方

梅の花年のこなたに咲そめてまた来ぬ春の色を見せける

由明

遠からぬ春をしれとや雪もまたふる年なから匂ふ梅か枝

義成

難波なる芦の一夜の春またてゆきのふる枝に咲や此花

重休

雪はまたふる年なから咲や此花の匂ひそ冬こもりせぬ

文崇

年のうちに咲やこの花立かえる春へもまたて香に匂ふらん

歳暮松

雍通

家くに松立渡しくる春を明日はむかえん年の暮れかた〔28才〕

重當

程近き春もしられて年の内にみとりをふくむ庭の松か枝

宗方

明日よりは常盤の姿も春にあげていと、緑の色やまさらん

由明

常盤なる松さへ暮て行年の尾上にたてる色は寂敷

義成

けふは又春のとなりと宿ことに松切はこふ年の暮かた

重休

明日よりは松のこすへも一しほのいろまさるへき春やむかへん

文崇

明日をまつ年のおはりの門松にまた来ぬ春の面影そたつ

寄風恋

雍通

ちぎり置人もやとふと閨の戸に心さはかす軒のまつ風

重當

とふ人のそれかとはかり袖の香のほのかにもる、胸■〔竹冠に戸〕【鉤簾の誤写か】の追かせ

宗方

たのめ置人は音せすいたつらにき、社詫れ軒のまつ風〔28ウ〕

由明

幾度か心のまつにさはくらんたのめなる軒の小夜風

義成

人は来て化に更行夜もすから聞もつれなき軒の姿風

重休

聞の戸にそよとの風の音信もまつ夜はよ所に聞としそなき

文崇

契り置人は問来ぬ聞の戸に音する夜半の風もうらめし

寄煙恋

雍通

消はてん契りはかな下むせふあし火の煙立も登らて

重當

頼め置し人はなひかて夕煙空にうき名の立そはかなき

宗方

するか成ふしのけふりのそれならて空にうき名の立も杜すれ

由明

いくとせか海士のたくものそれならて思ひの煙下にくゆらん

義成

恋しなんむなし煙のはてにたになひかは浮の世をや頼まん

— 29才

重休

立登るけふりにもしれもしほ木の下にこかるゝおもひ有とは

文崇

はかなしや浦の塩やの夕煙なひかぬ中に立しうき名は

寄露恋

雍通

待く来て来ぬ夜の床におもひ置なみたの露はいつかけぬへき

重當

ちぎりしは露のなさけの言の葉もなとわすられぬ妻と成らん

宗方

いかにせん消ははてなてあさ露の起別れ行床のつらさを

由明

よ所にたに哀とは見よ物思ふ袖より落る露のしら玉

義成

契り置し人の心の秋の露にはや色かはる言の葉そうき

重休

おもはしとおもふ夕もしほるゝは心の外の袖のしら露

文崇

いとはやも人の心の秋に逢て涙の露そ袖にみたるゝ — 29ウ

寄雨恋

雍通

雨そゝく軒の雫のたまゝも逢夜はあらて袖そぬれける

重當

つらくのみいひははなたて降そふる雨をかことに問来ぬはうし

宗方

かならずとちぎりし宵も降雨をかことになして来ぬ人はうし

恋れとも兎にも角にも思はれぬ身を知雨や袖ぬらすらん  
由明

義成

あたにのみ待て幾夜かふる雨をかことになして問ぬつれなき

重休

頼め置人の心の浮雲に身を知雨のふらぬ日そなき

文崇

降雨をかことになしていく夜半かつれなき人の音信もせぬ

寄瀧恋

雍通

わきかへり何おもふらんしらすうき年月をふるの瀧津瀬

一 30才

重當

うき名世に果は流れんせき詫る袖の涙の瀧のしら波

宗方

おもふ事かくとも人にいは波のくたけて落る袖の瀧津瀬

由明

流れての音にはたてし袖の上に落る泪は瀧をなすとも

義成

朝夕におもひ乱るゝ我袖のなみたの瀧はせく方そなき

重休

逢事をよ所にへたつる妹とせの中なる瀧そ袖にみなきる

おもひあまる心のうちの瀧津せをせくとせし間に袖そ朽ぬる  
文崇

寄艸恋

雍通

しらすりき人はさなから月草の移ろいやすき心なりとは

重當

はかなしな人の心の秋風に身はかるかやとおもひみたれて

宗方

契り置人のこゝろや日にそひてわすれ草のみ生ひしけるらん

一 30ウ

由明

根をたゆる程は心にかたくともしけりな果そ人思ひ艸

義成

かくそとも岩ねに生るしら菊のしられん中に朽なんはうし

重休

いひ出んふしこそなけれあしのねの下には通ふ心ながらも

文崇

いつ迄かしけき人目をしのふ艸しのふはかりに年の経ぬらん

寄葛恋

雍通

葛かつら来る夜もあらはかくはよも恨みし袖の露の乱れを

つれもなき人の心の秋風に恨そひぬる野への葛はら  
重當

色かはる人の心の秋かせにうらみそまさる野邊の葛原  
宗方

いく度か風の便りに葛の葉の恨ても猶人のつれなき  
由明

人は今秋の末野の霜にさへ猶かれ残る葛のうら風  
義成

逢事の枯行後も葛の葉のうらみは人に猶残りけり  
重休

すへかけて絶しとそ思ふ葛かつら人はくる夜の稀に成とも  
文崇

寄鳥恋

雍通

別るゝも待夜も同じ鳥かねをうらみて聞ぬ暁そなき

有し夜のその暁をおもふにも八聲の鳥のうきはわすれす  
重當

下紐のとけて逢夜の暁に別れを告る鳥のねはうし  
宗方

別れにそうきといふなる鳥かねを待更とのみ幾夜聞らん  
由明

義成

待侘て化に來ぬ夜は暁の八聲の鳥の音をのみそなく

稀に逢夜半ともしらて暁をいそく八聲の鳥はうらめし  
重休

打とけて逢夜なからも恋しきはあくと告る鳥の聲く  
文崇

寄獸恋

雍通

行めぐり逢夜もしらぬ人にさへなを心ひく牛の小車  
重當

おもへとも人の心はあら駒のなれ行すへをみるよしそ無  
宗方

ちきりてし人の秋より夜なくに独ふす猪の床そあれ行  
由明

聞もうしとはて幾夜か塵積る枕の山の小男鹿の聲  
義成

しるらめや野かいの駒も手に馴て人に引るゝ習有とは  
重休

なれにさへいとはるゝ身の契り哉問よる門の犬もとかめて  
文崇

君にあふしるへしあらはあら熊のふす山陰も分ていらなん

寄虫恋

雍通

頼め置し我をは秋のきりくす誰か枕にやよる契るらん」32才

重當

かくそともいはぬおもひは夜もすからもゆる蛍の類ひとをしれ

宗方

待ふかすよるは蛍のたくひにてもゆるおもひに身社こかるれ

由明

我おもひ何にたくへん鳴蟬ももゆる螢もひまは有けり

義明

しられしなかゝる契りの浅茅生に身は松虫の鳴よはるとも

重休

かけて猶頼むもはかな逢事はたえて久しきさゝかにの糸

文崇

末かけて頼むもはかなゆふへくまつ甲斐なきさゝかにのいと

寄涙恋

雍通

いはさりき涙時雨て我袖の色かはり行契りなれとは

重當

知らめやつゝめと猶も落増るなみたに袖のかはく間そなき

宗方

いかはかりむねの思ひをつゝむとも袖の泪はせく方そなき

由明

しみて忍ぶ理りしらぬ涙かな終にうき名や世にもらすへき

義成

きぬくにつかけし涙の袂をは干てや後の形見とも見ん

重休

我袖も化にのみやはしほるへきたか為ぬるゝ泪ならねは

文崇

人目をもいかてつゝまん袖の上におつる涙の色かはり行

寄玉恋

雍通

今は我そでのしからみせきかねておつる涙の滴のしら玉

重當

うき中はつゝむとすれとせきあまる袖のなみたそ玉と乱るゝ

宗方

つれもなき人待夜半は我袖にかゝる涙の玉を社ぬけ

由明

難面きを恋る心のやみをしはよる光てふ玉も照さし

義成

床の海の袖の泪もかはきなはしほひる玉を尋てや見ん」33才

重休

今はとてたえたに果ね玉の緒のなからへと社人もつられ

」32ウ

袖におく涙の玉の散くにくたけて人をおもひそめぬる  
文崇

寄鏡恋

かけて猶思ふもはかな逢事は遠山鳥の尾ちのかゝみか  
雍通

重當

日にそひて恋のやつれの十寸鏡むかふ姿を見るもくやしき

宗方

年月を隔てし中は山鳥のはつ尾の鏡影たにも見す

由明

いとゝ猶身のうきふしは十寸鏡昨日にけふは影もやつれて

義成

草深き野守の鏡まれにたにおもかけみせぬ人そ難面

重休

かく斗恋にやつるゝはしたかの野守の鏡影もはつかし

文崇

逢事の涙にくもる十寸鏡かけたに今はうとく成行  
— 33ウ

寄衣恋

雍通

しれかしな我恋衣うらみのみかさぬる床の夜半のおもひを

重當

はかなしや夢をたのめて宵くにかへす衣のうすき契りは

宗方

たまさかの逢夜も今は夢衣うすき契りの中そはかなき

由明

人しれす道に忍ふのすり衣かく乱るともいふよしそなき

義成

いつ迄かいはて忍ふのすり衣涙の露は袖にみたれて

重休

逢事も今は間遠の海士衣うらみに袖のぬれぬ日そなき

文崇

小夜衣かへして見つる夢ならてこひしき人に逢よしそなき

寄舟恋

雍通

我身をはいつしか蟹の捨小舟よるかた波に朽はてねとや」34才

重當

面影をほの見しはかり逢事はなききの小船波にたゝよふ

宗方

我中とはけて逢夜も難波江のあし分小船さはりかちなる

由明

うき恋に身は捨舟の浦かくれたゆとふ思ひ知人のなき

義成

おもへかし逢事波の蜚小舟うきしつみつゝ恋渡る身を

見てもしれ風なき仲の松浦船よるへもしらぬ心尽しを  
重休

文崇

恨詫ぬあはて月日は流れ江のあし分小舟さはりをゝさを

嶺上雲

雍通

松檜原あらはれそめてほのくくとあくる高根に雲そわかるゝ

重當

むら雨の晴行今朝の名残とや外山の峯にかゝる浮雲

宗方

山風のはらへは消て見るか内に又もうき立峯のしら雲  
「 34ウ

由明

いかはかりそひえて高き峯ならしかゝれる雲の晴るゝ日もなき

義成

山の端もほのかに見えて東雲のそらに別るゝ峯の横くも

重休

晴曇り日に幾度か山のはの面影かはるみねの浮くも

文崇

夕暮に松のあらしも音たえてひとむらかへる峯のしら雲

山中瀧

雍通

山高み松のひまく音立てひとすししろくおつる瀧波

重當

水上の氷やとけて流るらん音もそひ行山の瀧津瀧

宗方

水上はそことも見えす山のはこのまもりくる瀧のしら糸

由明

水上や雲ぬなるらし千尋にもあまりて落る山の瀧つせ

義成

山深み音もはけしく岩間よりくたけておつる瀧の白玉  
「 35オ

重休

山姫のしらへることに松風もこゑ立そふる瀧のしら糸

文崇

瀧津瀧の音こそ絶ね山ふかみまつのあらしもともにひゝきて

古郷木

雍通

植置し人の形見かふる郷のあれ行軒の松そふりせぬ

重當

柗檜はら木高く茂る古郷の庭はむかしの面影もなし

宗方

住人はあらで幾代をふる郷の庭に木高きまつ的一本

たち花やむかしのまゝに匂ふらん人は軒端の朽し跡にも  
由明

義成

植置し松は幾代を古郷の軒端淋しく陰茂るらん

重休

生茂る松の千年も今は又誰ともなはん古里の庭

文崇

うへ置し昔とははやすみすてゝ人は軒はの松の寒木に  
— 35ウ

旅行夕

雍通

問よりは猶袖ぬれん旅衣ひも夕露の深艸の里

重當

行つるゝ友そしたしき諸共にたひの夕のうさを語りて

宗方

うき旅にきけはやいとゝ哀さも深き野てらの入相のかね

由明

里迄と嘸急らし旅人のわけ行野路のいり相の鐘

義成

旅衣分来しかたを見返ればはや暮かゝる遠の山本

重休

立登るしつかたけの煙りこそ宿とふ道のしるへ成けれ

文崇

とひよらん宿こそなけれ旅衣日も暮果る武蔵野の原

関旅宿

雍通

起出ていさ越行ん関の戸のあけぬと告る鳥の八聲に  
— 36才

重當

逢坂の関に宿りを仮枕みはてぬ夢を覚す鳥か音

宗方

ぬる夜半の夢はへたてす古郷の人にもしはしあふ坂の関

由明

問よらん里もみゆれとかるかやの関に今宵は宿り求めき

義成

戸さゝねと暮れは誰も乗駒のすゝかの関に舍る旅人

重休

逢坂や知るもしらぬも日暮れはおなし関やの宿りをそとふ

文崇

ふり出る夕の雨に越わひて鈴鹿のせきに宿りをそとふ

旅泊舟

雍通

漕別れ明るはいづくに浮ねせんこよひは爰によるの友舟

重當

梶まくら同しうきねと漕よせてこと問かはす夜の友舟

友船と今宵頼むも梶枕明日はいつくに漕や別れん

宗方

― 36ウ

けふも又同しみなとのとまり舟憂波風に夢も結はて

由明

義成

明日はまたいつくの浦かしらすけの湊にこよひ浮ねをそする

重休

くれは又同しみなと、契りしも跡なき波の今朝の友舟

文崇

梶枕しらぬあし間の釣舟もこよひうきねの友と社なれ

山家嵐

雍通

軒近き松の梢の夕あらしなれても寂し山陰のいほ

重當

のかれこし深山の奥の仮庵は松の嵐を友とのみ聞

宗方

朝夕にこととふものは柴の戸に峯のあらしのかよふ斗そ

由明

世の中のうきにおもへは山陰のあらしの風は吹としもなし

義成

山陰に通れすむ身は世に通ふゆめもあらしのさはく松の戸

― 37オ

ちりの世は遠き深山の杵の戸にさはく嵐や何はこふらん

重休

聞馴て今は中く松にふくあらしを友のおくの山すみ

文崇

雨中竹

雍通

降雨に籬の竹の枝たれて葉末をわたる露のしら玉

重當

風に散雫涼しき呉竹のみとりの色も雨にそふらし

宗方

ふる雨に猶置そえて呉竹の小枝におもき露のしら玉

由明

雪ならは嘸聲聞ん呉竹のさ枝にたる雨のしつけさ

義成

花ならは嘸ないとはん降雨に緑ふかむる庭の呉竹

重休

そよきつる竹のは風の音かえて雨になり行窓の閑けさ

文崇

はれやらて日をふる雨にいく入のみとりそふらん庭の呉竹

― 37ウ

水邊松

雍通

そこ清く影を移して池水も同じ緑の庭の松か枝

重當

常盤なる影を移して松かえの千代の色ある庭の池水

宗方

影移す波も千とせの色そえて緑ふかむる松のした水

由明

常盤なる松の緑のかけとめて下行水も千代やすむらん

義成

幾千代のかけを移して行水に枝さしおほふまつの木高さ

重休

むすふ手に影を移して雫さへ千代の色ある松の下水

文崇

そこ清き池のみきはに枝たれて波も緑の岸の杳か枝

朝眺望

雍通

四方山はしらむとみしかいとはやも朝日きらめく雪の不二の根

— 38 才

重當

春深きかすみも晴て今朝は又日影さやかにむかふ遠山

宗方

朝戸出に向ふ外山の雲晴てひかけ移ろふ峯の松原

由明

朝なく霞に霧に幾とせか馴てそ向ふ沖津寫山

義成

明石瀉波の千里を見渡せば朝日いさよふ記路の遠山

重休

与謝の海や松はら遠く明過て日影そ渡る天の橋立

文崇

横雲は波に別れて朝ほらけあらはれ渡る三保の松はら

夕樵夫

雍通

妻木こる茲に夕日をのこしてもかへるさくるゝ山の下道

重當

暮ぬとて笛吹かはし柴人もつま木おひつれ帰る山みち

宗方

山陰や笛吹つれて入相のかねに帰さをいそく柴人

由明

哀なり己かよはひもゆふ附日かたふく山やたとる柴人

義成

たきゝ取巖の日影も入あひの鐘をかきりに帰る山人

重休

ゆふ間暮帰る木こりのなくさめや笛吹ならず谷の下道

立帰る己か里こそとふからめくるゝ山路をいそく柴ひと  
文崇

石清水

雍通

誰も皆くみてしるらん石清水きよき流のたえぬ恵みを

重當

いく代々も流てたえぬ石清水神の恵の深きをぞ知

宗方

とふとさも汲てしらるゝ石清水流て遠き代々の末迄

由明

いつか又すます成へき石清水流て代々にあらん限りは

義成

むかしより今もかはらて石清水深き恵の神そとふとき  
— 39才

重休

ます神の宮居とふとき石清水深き恵の代々に流れて

文崇

神も嘸嬉しからまし石清水にこらぬ御代を守る心は

田家烟

雍通

すみつける程もしられて小山田にけふり賑ふ民の家く

重當

こゝかしこ立る田面の夕煙賑ふ民の家居しられて

宗方

立登る烟りにもしれ寂しさにたえぬ夕の小山田の庵

由明

かくても程はすむとて夕烟たつるも淋し小山田の庵

義成

山田もるしつも夕の淋しさに心細くや烟立らん

重休

年毎にならふ軒端も真柴たく山田の庵そ烟賑ふ

文崇

□をめぐむ人や嬉しき朝夕に煙にきほふ小山田の庵  
— 39ウ

漁舟火

雍通

ほのめくは星かあらぬか晴るゝ夜のあしやの沖の海士のいさり

火

重當

暮るゝより影もあらはに漁火の数もそひ行沖の釣舟

宗方

浪遠くこきや出けん漁火のかけほのか成海士のつり舟

由明

くらき夜も沖にうかへる海士小舟数さへ見ゆるいさり火の影

義成

暮ぬれは己か浦く漕出とてらす浪間の海士のいさり火

重休

寛政五癸丑年

一 40ウ

夜も猶釣のいとなき身の業はあはれなるとの沖のいさり火

文崇

海士小船くるゝ磯邊を漕出て浪に数そふいさり火の影

寄道祝

雍通

治めしる道のをしへはかしこしなゆたかにすめる四方の民艸

一 40オ

ちりうせぬ松にならひて今も猶榮へつきせぬ言の葉の道

宗方

おさまれる世はしるかれや年毎に猶榮え行敷鳴の道

由明

あふけ猶教へ多かる中にしも又たくひなき敷鳴の道

義成

あふけ猶むかし替らぬ国の風吹傳へたる敷寫の道

重休

忘しな人の心も朝夕にみかける玉の言の葉の道

文崇

浪風もしつけき御代は玉ひろふみちそたとらぬ和哥の浦人

雍通

藤田重當

芝崎宗方

河合由明

三浦義成

溝口重休

藤井文崇

41オ

\* 1 以下、白杵藩主稲葉雍通については、白杵市史編纂室『白杵市史 上・中・下』（白杵市 一九九〇〜九二年）を参照した。

\* 2 父弘通の名代として寛政九年四月二十二日に江戸を発つて五月一八日に白杵入りした際の紀行文。翻刻は長谷川富美子「史料紹介 稲葉雍通「入邦記」」（『大分県地方史』一九〇号 大分県地方史研究会 二〇〇四年五月）。『舟水和歌集』から四年後の作品であり、雍通の古典教養がどのようなものに基づいているかがよくわかる。

\* 3 天保二年の鼈城藩臣録には大小姓に「溝口重當」という名が見え、明治の白杵藩士録には藤田・河合・芝崎・三浦・溝

口・藤井の姓が確認できる。なお、三浦義成の縁者と思われる人物が『百人一首抄』の奥書に「文政八酉年八月写之 三浦義房」とあり、白杵藩士録にも三浦義長がいる。雍通の文化活動を支えた一族か。

\*本稿は科研究課題「室町〜江戸初期における書物移動と大名文庫の蔵書形成に関する総合的研究」（課題番号：26284041）の成果の一部である。